これから先は図書館で……

教養部助教授　浅野　洋

漱石こと夏目金之助は、幼少期からあまり恵まれた生い立ちをしていない。五男三女の末子だった彼は、実母からはその高齢出産を恥しいものといわれ、実父からは文字通り「余計者」の扱いをうけた。生まれ落ちるとすぐに彼は里子にやられ、いったんは実家に戻ったものの、間もなく塩原という家に養子に出される。

八、九歳の頃、養家先にゴタゴタが起きたため、少年は何もわからぬままに実家に戻される。彼は、塩原の両親からその家に居る老夫婦が自分の祖父母だと教えられており、だから彼らを「おぢいさん」「おばあさん」と呼んだ。彼らもまた、その呼び名に応じて当然のような顔をしていた。だが、或る晩、少年は枕元でひそかに自分の名を呼ぶ女中の声に眼をさまし、その口から意外なことを聞かされる。「あなたがおぢいさんおばあさんだと思っていらっしゃる方は、本当はあなたのお父さんとおっ母さんなのですよ。」(「硝子戸の中」二十九)と。これまで<祖父と祖母>だと信じて疑わなかった人々が、或る瞬間から突然<父と母>に変る―そういう事実を前にして少年の漱石はどのように感じただろう。

たとえば、われわれの周囲をとりまく現実にはさまざまな“事情”がある。人間の生死や愛憎はこの世の常だし、それにつれて<別れ>や<出会い>がある。だから、父や母がやむなく新しい父や新しい母に代わることも少なくない。時にはそこに言い知れぬ悲しいドラマも紡がれる。

だが、漱石の“体験”はいささか事情が違っている。彼の場合、別の存在がそこに現われたわけではない。彼の前には以前と変らぬ人々が居り、しかもその同じ存在がなぜか突然別のモノに変ったのだ。

少年は、<祖父と祖母>の前では<孫>である。だが、新たに<父と母>に変じた存在の前では彼は<子>となってしまう。同じ人々の前に同じ自分が居る、それなのに自分は元の自分ではない!? つまり、人と人との関係は突如として変り得る―それが少年・漱石の直面した事実だった。

われわれにとって最も身近な、そして疑いようもないとみえている人間関係、たとえば親子や兄弟（姉妹）にしても、その関係は決して不変のモノではない。それはたかだか暗黙の約束ごとにすぎず、その基盤となる生活がホンのチョットでも変ればたちまち崩れてしまう習慣のようなものだ。石のように固くみえる家族の絆も実はひとつの<制度>にしかすぎない……。

少年の漱石に襲いかかった“事実”の意味とはたぶんそのようなものだった、と私は思っている。われわれ人間社会の根幹をなす基本的な人間関係でさえ、その足下は「板子一枚下は地獄」といったような非常に不安な<制度>の深い海だとしたら、そして、その水面上にぷかぷか漂流する存在が“自分”だとしたら、この自分とは何モノなのか。漱石が一生をかけて追究したテーマの出発点は、その辺にあったように思う。少くとも私にとって親しい「漱石」とは、そのような身近な事実を前にして根本的な問いを発しながらブルブルと身を震わせているような男だ。

そんな漱石が、後年、『三四郎』という作品の中に書いている―大学新人生の三四郎は講義でも満たされぬ胸中の「物足りなさ」を友人・佐々木与次郎に訴えた。すると与次郎は、電車に乗って東京市中を連れ回し、料理屋や寄席に案内したりしたあげく、最後にこう言うのだ、「これから先は図書館でなくっちゃ物足りない」―と。

街中の刺激や大学の講義に飽きたら、タメシに「図書館」へ行こう。そこは決して死んだ活字の山ではない。身震いをする漱石はもちろん、実に多くのナマミの人間たちがさまざまな熱い思いを抱いて集う饗宴の場なのだから。